

〔論文〕

保育者は音楽的な表現の保育をどう捉えているか

——保育士の語りの分析から——

横井志保

名古屋学院大学スポーツ健康学部

要 旨

子どもの日常生活において音楽的な表現，中でも楽器を使用したような表現や遊びは環境さえ整えれば良いというものではない。子どもが表現を受け取ることが音楽する第一歩となり，子どもと共に音楽する保育者が子どもの音楽フレームを理解することが子どもの表現を支える上で重要となる。また，子どもの音楽的な表現においては，保育者による一定の指導や援助が必要であり，保育者の与える影響は大きい。そこで，本研究では保育者が表現の保育をどのように捉え，とりわけ音楽的な表現においては何を大切に保育をしているのか，また，どこに課題を抱えているのかを半構造化インタビューを実施し，保育士の語りから明らかにすることを目的とした。SCATにて分析した結果，音楽的な表現は日常の保育とは切り離して考えられ，子どもの主体性を大切にしたい保育やピアノを弾くことの苦手意識が強すぎることで，自分の保育を過小評価し過ぎていることが示唆された。

キーワード：音楽的な表現，保育士の語り，SCAT，保育，苦手意識

A study of how early childhood educators perceive musical expressions

——Analysis of nursery teachers' narratives——

Shiho YOKOI

Faculty of Health and Sports
Nagoya Gakuin University

1. 問題と目的

新型コロナウイルス感染症が世界的なパンデミックにより猛威を振り1年以上が経過している。保育の現場からは、これまでのような歌声が聞こえなくなった。歌うことは保育の中では日常であり、音楽は子どもの生活の一部と言っても過言ではない。保育者がマスクで顔を半分隠して保育する中、子どもたちの喜怒哀楽、とりわけ表現しようとする心はこれまで通りに育っているのだろうか。

子どもの日常生活において音楽的な表現、中でも楽器を使用したような表現や遊びは環境さえ整えば良いというものではない。子どもが表現を受け取ることが音楽する第一歩となり、子どもと共に音楽する保育者が子どもの音楽フレームを理解することが子どもの表現を支える上で重要となることが筆者のこれまでの研究で明らかとなっている¹⁾。また、子どもの音楽的な表現においては、保育者による一定の指導や援助が必要であり、保育者の与える影響は大きい。

これまでに、子どもの音楽的な発達や音楽表現に関する育ちの評価をチェックリストを用いる方法で捉えようとする研究^{2) 3)}や、質問紙による音楽表現の捉えに関する研究の蓄積がある^{4) 5)}。それらの研究からは、保育者自身の音楽性や音楽観が子どもの表現に影響を及ぼすことや、保育者の経験年数や音楽理解度によって、自主性や規則性、創造性や協同性に関する視点から子どもの音楽的表現を捉える傾向にあることが明らかとなっている。しかし現状において、保育者が抱える音楽的な表現の保育における具体的な課題は未だに明らかになっていない。

そこで、本研究では保育者が表現の保育をどのように捉え、とりわけ音楽的な表現においては何を大切に保育をしているのか、また、どこに課題を抱えているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 方法

(1) 対象

愛知県N市立保育園保育士、保育歴13年、35歳、女性

(2) 実施日

2020年12月19日

(3) 手続き

プライバシーの保護のため、レンタルスペースにおいて半構造化インタビューを行った。インタビューは筆者が行い、ICレコーダーで録音し、逐語録を作成した。インタビューの時間はおよそ1時間であった。

(4) インタビューの内容

インタビューの主な内容は以下の通りである。

①園の保育の形態、②好きな音楽について、③音楽歴、④これまでに子どもたちで行った主な表現活

保育者は音楽的な表現の保育をどう捉えているか

動について、⑤子どもたちと共に行う表現活動における難しさについて、⑥園の音楽環境について、以上6つの項目について語ってもらった。

(5) 分析方法

小規模な質的データから構成概念を導き出すのに極めて有効な手法である SCAT (Steps for Coding and Theorization)⁶⁾⁷⁾ を用いて分析した。

3. 倫理的配慮

研究対象者の保育士には、研究の趣旨と方法、個人情報とプライバシーの保護、研究協力への自由意思と協力の撤回の自由について口頭と文章で説明し、本研究への同意を書面にて得た。また、本研究は、名古屋学院大学人を対象とする研究倫理委員会の承認を得た。

4. 結果と考察

インタビュー結果から SCAT により分析したストーリーラインは以下の通りである。

表1 SCAT によるストーリーライン

この保育士O先生は歌うことや音楽鑑賞を好み、楽器のアンサンブル経験も豊富である。遊び中心の、子どもの主体性を大切にしている園で保育をしていることで、理想と現実のギャップを感じながらも自身の持てる保育の力量を發揮しようと子ども理解に努め、保育計画を立案している。ただ、音楽的な表現の活動に関しては環境の構成と指導に苦慮している。O先生は数少ない限られた楽器を使用してできる器楽活動の情報を他の保育者やYouTube等から収集し、子どもの感覚へ働きかけることで子どもの記憶に感覚として残そうとしている。また、楽器の音色を重要視しており、粗悪な音のする古い楽器の使用を控えている。器楽活動に関して十分な配慮ができる一方で、自身の音楽的な知識や指導力に関しては不足を感じており、自己肯定感が低い。ピアノ演奏技術のレベルの低さにコンプレックスをもち、そのことが自己評価を下げる原因と考えられる。自身の音楽的な表現活動に対する取り組み方や指導法に関する評価は低く、自信喪失の上、指導上の不安を抱えているが、子どもたちの表現に関する評価は高く、達成感や満足感を子どもと共に味わっている。これまでの保育の経験から明らかとなった自己の音楽的な表現活動の指導に関する課題に取り組み、自己研鑽している。向上心が非常に旺盛である。

(1) 表現の保育の捉え方について

表現の保育についての語りからは、初めに劇遊びについて例を挙げて語り始めた。音楽的な表現について尋ねると、手話を付けて歌うこと、簡単な打楽器で音を鳴らして遊ぶこと、踊ること、リズム遊びについて語られたが、中心は発表会についてであった。

「見せるってことに関してはうまくいったと思うんですけど」「おうちの人に見せるぞっていうので、劇にしても、楽器にしても、すごく一体感はある、よし、張り切るぞっていう感じで、当日は多分、練習のときよりも、すごく上手な感じでできて、やったぞっていう達成感があった、見せることに関しては。」と、表現の保育に関する問いに対して語っている。発表会の出し物として子どもたちの表現が上手くいき、子どもと共に達成感や満足感が得られたことから、「見せること」が表現の保育として捉えられていることがわかる。

子どもが表現するとは、表現を見聴きする受け手があってこそ表現として成立する。それならば、発表会の出し物について語られることは当然の事の様であるが、発表会というのは非日常であり特別な1日である。その1日のために、ある一定の期間、練習がなされるだろう。しかし、保育士はその練習の過程で見てきた子どもの表現ではなく発表会の出来について語っている。O保育士にとって‘音楽的な表現’は、日常の保育とは切り離されて考えられていることがわかる。

(2) 音楽的な表現における子どもの主体性とは

先述の通り、音楽的な表現の場合、子ども主体の活動は難しい。子どもの主体性を大切にしている園の方針がここではO保育士を苦しめている。「主体性とか保育っていう面での楽器遊びってなると、うまくは行ってないかなと思います」「何か音楽に合わせてやりたいみたいなのが子どもたちから出てきたのに合わせて、いろんな曲で楽しんでたら、ちょっと違ったのかなと思ってて」「私発信が強かったのかなというか、担任が言うから、じゃあ、これでやろうかな。まあ、言わなくなったから、あ、終わったのかなっていう感覚だったかもしれないと思うので。」と、語り、子どもの主体性を狭義に捉えていることがわかる。

ここで語られている発表会のための表現活動では、一定の条件の下、子どもの発達に相応しい選曲や楽器選びは保育者が行うことは適切と言える。O保育士は他の遊び同様に子どもからやりたいことが出てくることが、主体的な活動であると捉えているようである。しかし、ここで大切なことは子どもがこの活動に主体的にかかわるかどうかということである。また、この活動の中で友だちの鳴らす音と自分の音の違いやリズムの違いに気付いたり、音の重なりに気付いたりするような保育者の働きかけが音楽的な表現における子どもの主体性を大切に作る支えとなる。

(3) ピアノは表現の保育に必要なか

O保育士はピアノ演奏に苦手意識を持ち、ピアノが思う様に弾けないことで音楽的な表現活動の機会が減っていると語った。歌の伴奏はピアノの方が音が取りやすく子どもたちのためになると考えている。そして、園にある楽器の音色に注意を払うことができるし、活動のアイデアは豊富である。しかし、ピアノが苦手という意識は活動の機会を遠ざけている。O保育士は子どもと向かい合って歌うことができる手話を付けた歌をよく歌い、目と目を合わせて歌うことの大切さに気付き子どもの想いを受け取りながら自分の想いを歌に乗せて伝える楽しさを既に味わっているが、歌はピアノ伴奏で歌うものという固定概念に縛られている。保育所保育指針解説⁸⁾には「大切なことは、正しい発声や音程で歌うことや楽器を正しく上手に演奏することではなく、幼児自らが音や音楽で十分遊び、表現す

る楽しさを味わうことである。」と、ある。確かにピアノ伴奏で歌うことは、ピアノの音にリードされた子どもたちの声一つになり、音楽している感覚が強くなる。梅澤⁹⁾は「音楽的な場」の強まる時として、「うたうことに意識をむけて自身の身体を統合している状態、瞬間瞬間、音楽する自己に統合されること」、「その状態を持続すること」の2点を挙げている。つまり、ピアノ伴奏無しであっても、素朴に歌声を聴き合い没入して歌うことで十分に歌う楽しさを味わうことができ、表現のねらいは達成されよう。

(4) 音楽的な表現の保育の自己評価を上げるためには

0保育士は子どもの音楽的な表現活動に対する評価は高いが、自身のピアノ演奏の技術が低く苦手という思い込みから、自身の指導に対する評価が低い。また、その低さは常に活動に対する不安となっている。0保育士は不安解消のために自信を付けたいと考えており、そのため、他学年の活動を見て参考にしたり、インターネットの動画サイトに載せられている様々な保育者たちのアイデアの発信から活動のヒントを得たり、研修に参加したりしている。

ここで問題は、0保育士の心の奥底にある、‘ピアノが苦手’という意識である。子どもの発達に合った活動のヒントや器楽活動の指導法をいくら研修で得たとしても、ピアノが苦手であるから音楽的な表現の指導が上手くできないという苦手意識から解放されない限り、自信をつけることは困難であり、自己評価を上げることに繋がらない。ピアノが上手く弾けることが子どもの音楽的な表現活動の指導ができることとイコールではないことを気付かせることが重要であり、音楽的な表現の保育の自己評価を上げることになろう。

総括と課題

0保育士の語りから表現の保育について検討してきた。表現は他者に受け止められてこそ表現となる。受け止められた表現が、また反応として返ってくる。そしてまたその反応を受けて表現する。その繰り返しで子どもの豊かな表現力が育つ。0保育士にとって表現の保育とは、‘発表会’として捉えられており、日々の保育とは考えにくいことが示唆された。発表会は子どもにとってハレの舞台であり特別である。日常の表現の保育そのものとは考えにくい、子どもの表現を切り取り保育者が色付けしたものと言えよう。子どもは行事を通して育つことも多く、保育者に彩られた日常の表現は子どもに取り込まれ、また形を変えて子どもの表現となって現れることに繋がることであろう。

また、音楽的な表現の活動において、子どもが主体的に活動するというを狭義に捉え、他の遊び同様の捉え方をしていることが示唆された。音楽的な表現の活動は自然発生的に生まれる遊びとは異なり、子どもが主体的に活動にかかわろうとする姿勢を認め支えることが大切であるので、活動を的確に評価する観点が保育者に必要となることが示唆された。

そして、保育者が抱えるピアノに対する苦手意識を払拭することが、保育者が子どもと共に心から音楽的な表現の活動を楽しめる一番の近道となろう。

本研究ではピアノに対する苦手意識を持った保育士0先生が対象であったが、今後は、ピアノを弾

くことに苦手意識を持たない保育者を対象に研究を継続したい。また、保育者養成において、ピアノ一辺倒にならない指導が望まれる。

謝辞

本研究にあたり研究協力を快く引き受けてくださり貴重な休日にインタビューに応じてくださった保育士O先生に感謝致します。

引用・参考文献

- 1) 横井志保, 五十嵐睦美「子どもは音をいかに音楽するのか」名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇 第54巻 第1号 pp. 15-22 (2017)
- 2) 大城典子・比嘉絵美・緒方茂樹「子どもの音楽における発達と評価に関する研究—教育実践場面における活用をめざして—」琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要 3 pp. 45-54 (2012)
- 3) 古本奈奈代・児嶋輝美「保育の改善につながるチェックリストの作成—音楽表現に関する保育の評価を用いての検討—」教育情報研究 30(2) pp. 3-9 (2014)
- 4) 田崎教子「「表現(音楽)」に対する保育者の保育観と音楽観—質的な質問紙調査をもとにして—」東京福祉大学・大学院紀要 4(1) pp. 43-54 (2013)
- 5) 五十嵐睦美・高瀬慎二「幼児の音楽的表現に対する保育者の捉え方の実態—保育者の経験年数と音楽理解度を手がかりにして—」桜花学園大学保育学部研究紀要 21 pp. 13-18 (2020)
- 6) 大谷尚「4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学) 54-2 (2008)
- 7) 大谷尚『質的研究の考え方』名古屋大学出版会(2019)
- 8) 厚生労働省『保育所保育指針解説』p. 280 (2018)
- 9) 梅澤由紀子「幼児のうたう活動における「音楽的な場」の成り立ち」愛知教育大学教育実践総合センター紀要 創刊号 pp. 143-148 (1998)

保育者は音楽的な表現の保育をどう捉えているか

22	保育士	うん、はい、まごいわれし遊べようというのには悪いといいたから、5、6人が集まるので、やっぱりリズム感のいいリズムを同じにしていた方がいいかなと思って、それで、あ、あ、自由遊びの中で置くかと思う、それ見て、	本生感 器楽活動見直し	子どもの姿から今後の指導法を探る	子どもの理解に基づいた指導
23	聴き手	具体的にこれまでもうまごいわれし遊べようというのには悪いといいたから、5、6人が集まるので、やっぱりリズム感のいいリズムを同じにしていた方がいいかなと思って、それで、あ、あ、自由遊びの中で置くかと思う、それ見て、	振り返り 反省 時間制限	経験による指導法の蓄積	経験による指導法の蓄積
24	保育士	うん、はい、まごいわれし遊べようというのには悪いといいたから、5、6人が集まるので、やっぱりリズム感のいいリズムを同じにしていた方がいいかなと思って、それで、あ、あ、自由遊びの中で置くかと思う、それ見て、	振り返り 反省 時間制限	経験による指導法の蓄積	経験による指導法の蓄積
25	聴き手	子どもたちからこんなことしたいとか、そういうのは出ませんでしたか？	発達	子どもの育ち	子どもの喜び
26	保育士	その活動は先生からすると満足できるものではなかったのですが、			
27	聴き手	子ども、見せるってことに関してはうまくいったと思うんですけど、	満足感 達成感	高い評価	結果に対する高い評価
28	保育士	あ、上手だったからですね。結構、真面目な子たちなので、おうちの人は見せるぞっていうので、劇にしても、楽器にしても、すごく一体感はあるんですけど、当日は多分、練習のときよりも、できて、やったぞっていう達成感があったんですけど、	達成感 誇り 失敗	全体像に対する肯定的な評価 細部に対する低い評価	結果に対する高い評価 結果に反して指導法に対する低い評価
29	聴き手	先生の言われた保育的に考えるとうまくいく活動として成立するか、考えられたいことはありますか？			
30	保育士	3歳っていうのもあった、じゃあ、『おもちゃのチャチャチャ』でやろうかみたいな提案だったので、もうちょっと早くも楽器を触らせて、なんか、何か言葉に合わせやったりしたいみたいな感じで、おうちの人も、楽器に合わせる、当日は多分、練習のときよりも、できて、やったぞっていう達成感があったんですけど、	達成感 誇り 失敗	全体像に対する肯定的な評価 細部に対する低い評価	結果に対する高い評価 結果に反して指導法に対する低い評価
31	聴き手	3歳っていうのもあった、じゃあ、『おもちゃのチャチャチャ』でやろうかみたいな提案だったので、もうちょっと早くも楽器を触らせて、なんか、何か言葉に合わせやったりしたいみたいな感じで、おうちの人も、楽器に合わせる、当日は多分、練習のときよりも、できて、やったぞっていう達成感があったんですけど、	振り返り 後附 時間制約 満足感 達成感	結果の見直し 全体に対する肯定的評価 器楽活動に対する肯定的な評価	指導法に対する低い評価 結果に対する肯定的評価 器楽活動に対する肯定的な評価
32	保育士	うん、はい、まごいわれし遊べようというのには悪いといいたから、5、6人が集まるので、やっぱりリズム感のいいリズムを同じにしていた方がいいかなと思って、それで、あ、あ、自由遊びの中で置くかと思う、それ見て、			
33	聴き手	特に音楽的な表現活動で、子どもたちとすとときに難しいと思うか、それか不安があったらお聞かせください。			

